

# Beowulf, l. 1134 gearの解釈について

著者	船井 純平
雑誌名	名古屋学院大学論集 言語・文化篇
巻	24
号	2
ページ	209-218
発行年	2013-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15012/00000480">http://doi.org/10.15012/00000480</a>

## *Beowulf*, l. 1134 gear の解釈について

船 井 純 平

### はじめに

古英詩 *Beowulf* では宴席で昔のデネとフリジア人との争いを扱った歌が吟唱される場面が描写されており、その中には次のような一節がある。

opðæt oþer com  
gear in geardas, swa nu gyt deð,  
þa ðe syngales sele bewitiað,  
wuldortorhtan weder.<sup>1)</sup>

(ll. 1133b–36a)

ここはいわゆる Finn Episode の一部であるが、引用箇所 *gear* は文法的に後続の *wuldortorhtan weder* と *variation* を構成しているとする解釈が一般的に支持されている。そして全体は例えば ‘until another year arrived among the earth’s habitations, just as it still does even now and those times of heavenly bright weather which always observe their proper season.’<sup>2)</sup> のように訳される。

さらに多くの刊本の *glossary* および注においては、この箇所の *gear* に対して ‘year’ に加えて ‘spring’ という意味を記載しており<sup>3)</sup>、そのため *opðæt* から *deð* までは ‘until another spring came to the dwellings of men, just as it still does’<sup>4)</sup> のようにしばしば訳出される。つまり広く行われている解釈は、該当箇所は冬から春への季節の移り変わりを表現したもので、*gear* が意味する「春」の季節描写となっているというものである。本稿では古英語時代の季節感および *gear* の用法を検討することによってこの解釈を再考したい。

### 1 伝統的な季節区分

古英語時代の季節感を見る前に、まずそれ以前の伝統的な季節の分け方がどのようになっているかということを見ていきたい。Edmund Spenser の *The Faerie Queene* に見られるような四季の描写をはじめ中世以降のイギリス文学には細やかな四季の描写は数多いが、時代をさかのぼると本来季節は4区分ではなかった<sup>5)</sup>。印欧語族内の諸言語における季節名の比較によれば、「冬」を表す単語が最も同源語が多く見られ、それに比べて「夏」と「春」を表す単語に関してはあまり

一致が見られない。このことから、おそらく印欧語における最も初期の季節の分け方は‘winter’と‘non-winter’であっただろうと推測されている<sup>6)</sup>。古英語ではwinter「冬」がyear「年」の意味でしばしば用いられており、wintergetelおよびwintergerīmは「年数」をwinterstealは「満一歳の馬」を意味する。またShakespeareの*The Comedy of Errors* 1.1.132や*Richard II* 1.3.141では「夏」が「年」の意味で用いられている。これらの季節名の用法は伝統的な季節区分の名残りであるといえる。

しばしば引用されるように、Tacitusの*Germania*にはゲルマン人の季節の分け方に言及した箇所がある。

unde annum quoque ipsum non in totidem digerunt species: hiems et ver et aestas intellectum ac vocabula habent, autumnus perinde nomen ac bona ignorantur.

Accordingly the year itself is not divided into as many parts as with us: winter, spring, summer, each has a meaning and name; of autumn the name alike and bounties are unknown.<sup>7)</sup>

ここで見られる「秋」がゲルマン人の間では知られていなかったという記述は現実を反映したものではないとする解釈もある<sup>8)</sup>。しかしながら現在のゲルマン語を見ると、英語autumnはラテン語autumnusの系統の借用語であり、ドイツ語Herbstも本来は「収穫（の時）」にはかならない。牧畜的な生活を営む人たちにとっては家畜を野に放って養う期間と寒さからこれを守る期間の二つの区別しか必要でなく、秋は収穫とともに区別されたと考えるのが妥当だろう<sup>9)</sup>。

春が比較的新しい概念であることは、ゲルマン語内の諸言語においてそれぞれの季節名に対してどのような単語が記録されているかを見ても明らかである<sup>10)</sup>。

	WINTER	SPRING	SUMMER	AUTUMN
Goth.	wintrus	• • • •	asans	• • • •
ON	vetr	vār	sumar	havst
Dan.	vinter	voraar, vaar	sommer	efteraar (høst)
Sw.	vinter	vår	sommar	höst
OE	winter	lencten	sumor	hærfest
ME	winter	lente(n)	sumer	hervest, autum(p)ne
NE	winter	spring	summer	autumn, fall
Du.	winter	voorjaar, lente	zomer	herfst
OHG	winter	lenzo	sumar	herbist
MHG	winter	lenze	sumer	herb(e)st
NHG	winter	frühling	sommer	herbst

上記四季名の分布が示すように、ゲルマン語内の諸言語でも「冬」と「夏」を表す単語の一致が目立つのに対して、「春」に関しては語源が異なる単語が複数存在している。

古英詩においては、四季の名称はそれぞれ *winter*, *sumor*, *lencten*, *hærfest* が用いられている。古英詩全体で *winter* が単独で 116 例記録されており<sup>11)</sup>、複合語も含めると四季名の中では最も頻繁に使用されている。続いて *sumor* の頻度が高く、25 例が記録されている。これに対して *lencten* が 9 例、*hærfest* は 7 例と「冬」や「夏」と比較すると使用頻度に大きな差がある。さらに四季名の中で *winter* にのみ「年」の意味での用例が見られることは、*winter* の用例数の多さと共に「冬」を中心にした季節感の名残りを示している。

一方 *lencten* は初期の法律集においても「春」ではなく「四旬節」というキリスト教的な意味で用いられている。例えばアルフレッド法典の教会の聖域権に関する条文では、*lenctenfæsten* が以下の箇所に見られる。

Se ðe stalað on Sunnanniht oððe on Gehhol oððe on Eastron oððe on ðone halgan Ðunresdæg on Gangdagas: ðara gehwelc we willað sie twybote, swa on Lenctenfæsten.

日曜日、クリスマス、復活祭、聖木曜日、または祈願節に盗みをはたらいた者は、そのいずれの事件についても、四旬節の時と同様に、2 倍の損害賠償金を支払わなければならない<sup>12)</sup>。

アルフレッド法典では *lencten*, *lenctenfæsten* が数例記録されているが、全て「四旬節」の意味である。このように、純粋に季節としての「春」を表す用例の少なさからもこの単語は季節名というよりキリスト教の教会暦における用語という性格が強いといえる。古英語においては季節としての「春」が言及されることは少ないのである。

知識人階級ではなく民衆の間では伝統的な二季区分が遅くまで残ったことは、現在でも北ヨーロッパ各地に見られる「冬と夏の戦い」の行事が示している<sup>13)</sup>。ゲルマン圏の国々で現在でも行われるいくつかの祭りの主題には冬と夏の戦いがあり、これは夏が冬に勝って豊作をもたらしてくれることが元来人々の最大の関心事だったためである。形式的にはキリスト教的色彩が加えられている場合も多いが、太陽の復活を祈願する冬至の祭りや強い太陽をより長い間ひきとめる夏至の祭りが多く見られるのも伝統的な季節に対する考え方が民衆の間では根強く残っていることを示唆するものといえる。

## 2 古英詩における季節の描写

上では印欧語族における伝統的な季節の分け方を見てきたが、ここでは古英詩の描写に表れている季節感を見ていきたい。当時の季節感が分かる資料として古英詩 *Menologium* があるが、これは紀元 1000 年頃にラテン語の手本などを基にして書かれたもので、作者は Church Latin に通じていたと考えられている<sup>14)</sup>。この詩は年間を通してキリスト教の聖人に関連する祭日を記

憶するためのものであり、そのためにまとまった季節の描写が見られるのが特徴である。87行目以降では夏が言及されており、そこではまずはじめに夏が *sigelbeorhte dagas* 「太陽が輝く日々」と *wearme gewyderu* 「暖かい気候」を町にもたらすと描写されている。続いて、野原には *blostmum blowað* 「花が咲く」となっており、ここでは「花が咲く」という描写が「夏」に結び付けられていることが注目される。同じように古英詩 *Guthlac B*, 1273 行目以降でも夏を比喻にした描写で, *wyrta geblowene* 「花咲く草木」が用いられており、「花が咲く」季節は「夏」であると考えられていたことを示している。

*Menologium* の140行目以降では秋について言及されており, *hærfest* 「秋」には *wlitig*, *wæstmum hladden* 「美しい, 実りを背負った」という形容語句が与えられ, *wela byð geywed / fægere on foldan* 「豊かさが大地にふさわしく示される」と描写されている。現代におけるイメージと同様に, 秋はここでも「実り」と結び付けられている。143行目における *fægere on foldan* は, 冒頭で引用した問題の箇所における表現 *fæger foldan* とほぼ同じものである。

さらに, この詩の202行目以降には秋から冬への季節変化の描写がある。そこでは, 冬が *sigelbeortne genimð / hærfest mid herige / hrimes and snawes* 「霜と雪の軍隊で太陽輝く秋を捕まえる」と書かれ, 続いて *wunian ne moton / wangas grene, / foldan frætuwe* 「緑の野原, 大地の飾りはとどまれない」と表現される。この箇所では「秋」の描写に *sigelbeorhtne* 「太陽が輝く」という形容詞が与えられており, また *wangas grene* 「緑の原」という表現からも分かるように, 「秋」の収穫を強調する描写を別にすれば, 「夏」と「秋」の描写にはあまり明確な違いがないことが特徴である。

キリストの誕生から始まるこの詩が書かれた目的は, キリスト教暦の1年間の祭日を浸透させることであり, それはこの詩の結びの一節にある *Nu ge findan magon / haligra tiida þe man healdan sceal* 「今や汝らは人々が守るべき聖なる日を知ることができよう」という言葉によく表れている。つまり作者の重点は祭日に置かれており, 季節描写に関してはおそらく自由に記述したために作者の季節感が示される結果となっていると考えられる。夏と秋の描写に明確な違いが見られないことや春の描写自体が見られないことから, この詩の作者は元来の2季区分に近い季節感を持っていたと推測される。

*Menologium* と比較すると記述は少ないが, 他の古英詩においても四季に言及した箇所がある。例えば古英詩 *Maxims II* には以下の記述が見られる。

Winter byð cealdost,  
lencten hrimgost            (he byð lengest ceald),  
sumor sunwlitegost        (swegel byð hatost),  
hærfest hreðeade gost,       hæleðum bringeð  
geres wæstmas,            þa þe him god sendeð.

[*Maxims II*, ll. 5b-9]

Winter is the coldest time, spring the frostiest — it is cold the longest. Summer is the most sunshiny — the sun is hottest — and autumn the most gloriously abundant — it brings men the fruits of the year, which God sends them.<sup>15)</sup>

引用箇所で各季節に与えられた描写を見ると、ここでは「春」が言及されているものの「冬」と「春」の区別が曖昧であることが分かる。「冬」が *cealdost* 「最も寒い」と形容されているのに対して「春」は *hrimigost* 「霜が最も多く」、*lengest ceald* 「寒さが最も長い」とされており実質的な違いが見られない。また *Maxims I*, 75 行以下では季節の移り変わりが描写されているが、冬から夏の変化しか書かれていないことも注目に値する。

*Menologium, Maxims II* において「冬」と明確に区別された「春」の描写が見られないのと「秋」と「夏」の形容語句がはっきり区別されていないことは、イギリスが高緯度にあるという地理的条件も関係があるだろう。暑い夏の期間が短い高緯度の地域においてはその移行期間である「春」は「秋」とともに元来明確に意識されにくかったといえる。描写から判断すると、それぞれの作者は四季の概念は知識としては知りながらも実際は2季区分あるいは3季区分で季節を認識していた可能性が高い。キリスト教ラテン文化との接触によりここに見られるように四季の概念は導入されているものの、それは必ずしも十分に実感を伴ったものではなかったと考えられる<sup>16)</sup>。

古英詩全体を通して「春」へのまとまった言及は稀である。上述のように春の名称である *lencten* は使用頻度が低いことに加えて、「四旬節」というキリスト教的な文脈において用いられることも多いが、このように *lencten* にキリスト教的な意味を与えているのはゲルマン語の中では英語だけである<sup>17)</sup>。古英詩では、*Phoenix* における以下の一節がほぼ唯一の冬や夏と明確に区別された「春」の描写である

þonne sunnan glæm  
on lenctenne, lifes tacen,  
weceð woruldgestreon, þæt þa wæstmas beoð  
þurh agne gecynd eft acende,  
foldan frætwæ.

[*Phoenix*, ll. 253b–57a]

when the gleam of the sun, the sign of life, in spring brings forth the world's wealth, so that according to their proper nature these fruits are born again, the adornments of the earth;<sup>18)</sup>

引用箇所では *lencten* は文脈的に「春」を意味していることは疑いがなく、またその描写自体も中英語以降に見られる春の描写と類似する点もある。しかしながらここでは不死鳥が生まれ変わる様子を春の描写に当てはめており、純粹に季節としての春を描写しているわけではないことには注意を払う必要があるだろう。中英語以降の文学に見られる春の特徴のはっきりとした描写は、

この時代にはほとんど見られないものである。

既に見た *Menologium*, *Maxims* における季節の描写は、古英詩の作者がキリスト教ラテン文化によってもたらされた四季区分は概念としては知りながらもなお伝統的な季節感を持ち続けていることを示している。そしてこのような状況はアングロサクソン時代の末期になっても大きく変わっていなかったと推測される。紀元1000年頃の著述家 Ælfric Bata は Ælfric の *Colloquium* を改訂し、自らも *Colloquia* を書いている。その中には季節への言及が見られるがそれは以下のようにになっている。

Ego uolo crās equitare siue nauigare ad ciuitatem propter meam necessitatem, et émere ibi que necessaria sunt mihi antequam hiemps aduenerit, quoniam ęstas est modo et bone uie et bone aure et tranquille ad ambulandum siue equitandum uel nauigandum.

[*The Colloquies of Ælfric Bata* 20]

Tomorrow I'll ride or sail to the city on an errand to buy what I need before winter comes, since now it's summer and the weather and the roads are good and peaceful for walking, riding or sailing.<sup>19)</sup>

引用箇所は、夏である今のうちに冬に向けて必要なものを購入するために翌日町に赴く予定であるという内容である。

Bata のものに限らず、*Colloquies* は本来 practical なラテン語での会話を教育するためのものであり、内容は必然的に実際の生活に即したものとなっている。また、Bata の語彙教育の目立った特徴として単語の variation を可能な限り羅列することが挙げられる<sup>20)</sup>。Bata は文がそのために不自然になるにもかかわらず、多くの箇所で積極的に様々な同義語、類義語を会話に含めている。例えば暦月と曜日に言及している箇所では省くことはなく全ての月名および曜日名を列挙している。しかしながら上記引用箇所では「春」と「秋」は言及されていない。また、別の箇所でも気候が言及されているが、'it's summer weather and not wintry'<sup>21)</sup> となっており、やはり夏と冬の表現しか用いられていない。これらは、この時代になってもまだ二季区分が一部の知識人の間にも根強く残っていたことを示すものであると考えられる。

### 3 *Beowulf* 1134 行目 gear の解釈

古英語時代においても伝統的な季節感がよく残っていたことを既に見てきたが、以下では冒頭で引用した箇所において wuldortorhtan weder と同格になっている gear の解釈を検討したい。古英語 gear は現代英語の 'year' にあたる単語であり、古英詩でもその意味の用例が多い。例えば、*Genesis*, 1. 2304, *Elene*, 1. 7, *Guthlac A*, 1. 936, *The Riming Poem*, 1. 25, *Menologium*, 1. 6, *The Paris Psalter*, P76. 5, 2, P101. 21, 7 などはいずれも「年」の意味で用いられている。

このように用例数からいえば「年」という意味が多いが、*gear*が特定の季節を表している可能性がある箇所として *Guthlac A* における一節がある。

Smolt wæs se sigewong            ond sele niwe,  
fæger fugla reord,        folde geblowen;  
geacas gear budon.

[*Guthlac A*, ll. 742–44a]

The site of his triumph and his lodgings were peaceful anew, the singing of the birds was lovely, the countryside was sprung into blossom and cuckoos heralded the year.<sup>22)</sup>

引用箇所では *gear* は ‘year’ と訳出されているが、*geblowen* 「花が開く」という表現は既に見たように夏の描写において見られるものである。また、*geacas* 「郭公」は古英語に限らず北歐においても初期の詩では夏の鳥であるとされている<sup>23)</sup>。郭公については *The Seafarer*, 53行以降でも以下の記述が見られる。

Swylce geac monað geomran reorde,  
singeð sumeres weard, sorge beodeð  
bitter in breosthord.

[*The Seafarer*, ll. 53–55a]

The cuckoo too serves warning by its mournful cry; summer’s herald sings and foretells cruel distress at heart.<sup>24)</sup>

ここでも *geac* 「郭公」は *sumeres weard* 「夏の守り手」と同格になっており、夏と関連付けられている。これらのことから上記 *Guthlac A* の引用箇所における *gear* は一般的な「年」という意味よりも季節としての「夏」が意図されていると解釈するのが適切であると思われる。

*gear* が「年」以外の意味で用いられている他の例として、古英語 *Rune Poem* の *g-rune* (*gēr*) に与えられたスタンザがある。

ð byþ gumena hiht,        ðon god læteþ,  
halig heofones cyning,    hrusan syllan  
beorhte bleða        beornum and ðearfum.

[*Rune Poem*, ll. 32–4]

Harvest is a joy to men, when God, the holy king of heaven, makes the earth bring forth bright



fruits for rich and poor alike.<sup>25)</sup>

ここでの gēr は ‘harvest’ あるいは ‘fruitful year’ と訳され<sup>26)</sup>、「春」というよりは「夏」から「秋」の実りがもたらされる季節を表していると解釈される。また、この同じルーン文字に対して Icelandic ルーン詩では以下のスタンザが与えられている。

(ár) er gumna góðð  
ok got sumar  
ok algróinn akr.

[The Icelandic *Rune Poem*, ll. 28–30]

harvest is a blessing to men and good summer and fully ripe crops.<sup>27)</sup>

引用箇所に見られるように、Icelandic ルーン詩では対応する ár が ‘the height of their growing season’ = summer<sup>28)</sup> と定義されており、季節としての「夏」を表している。

以上のように、用例数は少ないものの gear は作物を多く生み出す季節を表す場合もあることが分かる。gear が「年」以外の意味を表す際は現代でいえば「夏」に近い時期を表す語として用いられるのである。

既に見てきたように、伝統的な季節感がよく残っている古英詩では「春」を表す単語である lencten の季節語としての用例も少なく、「春」の描写にもはっきりとした特徴が見られない。また gear の用例から見ても、*Beowulf* の問題の箇所における gear が季節としての「春」を表していると考えべき根拠は薄いと思われる。詩人の季節感は厳密な四季区分ではなく伝統的な二季区分に近い曖昧なものだったと推測され、現在の四季区分における「春」を表す現代英語の ‘spring’ は問題の箇所における gear の訳語としては適切ではないだろう。

*Beowulf* における自然の描写はしばしば登場人物の行動や心情の象徴となっており<sup>29)</sup>、例えば 515 行目以降の Beowulf と Breca の競泳に言及した箇所では、水泳による激しい対決の場面に「冬の海」の描写が与えられている。また同じように北欧の *Grettir's Saga* でも Grettir が凍る海を泳ぐ話があるが<sup>30)</sup>、このような描写は季節が「冬」であることを示すものであるというよりは、激しい対決の背景として採用されているものである。Walter J. Ong は口承社会における思考と表現の数ある特徴のうちのひとつとして、知識が人間的な生活世界に密接に関わるように概念化され、言葉にされるということを挙げている<sup>31)</sup>。*Beowulf* におけるいくつかの自然描写も、人間と切り離された客観的なものでなく人間の行動の全体的なコンテキストの中で表現されているのである。

冒頭で引用した問題の箇所が一部を構成している Finn Episode 全体の内容は以下のようにまとめられる。

フリジア人の王フィン、デネの統領フネフの妹であるヒルデブルフを妃に迎えた。或る時

フネフは妹の嫁ぎ先に滞在していたが、その間に両民族の間に争いが起り、フネフは夜討ちに遭って殺される。フィンとヒルデブルフとの間に生まれた息子（フネフの甥）も死ぬ。その後和平が結ばれ、フネフの部将ヘンジェストとその手勢は、フィン王の臣下と同等の扱いを受けることが定められる。ところが、冬が過ぎると、恨みを忘れかねているヘンジェストは配下に唆かされ、復讐を企てる。一方、デネ方のグースラーフとオースラーフとは故国へ帰り、精兵の一隊を引き具して、ヘンジェストの待っているフリジアへ戻って来る。彼らは力を合わせてフィン王を彼自身の宮殿において殺し、妃のヒルデブルフを故国へ連れ帰る<sup>32)</sup>。

このような Finn Episode 全体の文脈の中にあって、*Beowulf* における問題の箇所は恨みを抱きつつも行動を起こさないでいた Hengest が復讐を決意する心境に至る変化を描写した部分なのである。

*Beowulf* に見られる多くの自然描写がそうであるように、問題の箇所における季節の変化の描写は、Hengest の心情の変化、冬の描写を伴う「恨みを抱きつつ行動しないでいる状態」から輝く陽気の描写を伴う「復讐を決意した」状態への変化を表していると考えられる。該当箇所は古英詩では珍しい「春」の季節描写であるというよりは、*narration* における人物の心情の変化を表すための描写であると解釈するのが妥当である。

## まとめ

問題の箇所は「新たな年が来て、季節が変わった」という記述であって、「春」の描写が詩人によって意図されているとはいえない。いくつかの訳および語注に見られるように gear を ‘spring’ と解釈するのはこの語の用法から、また当時の季節感からも問題があるように思われる。冒頭で引用した箇所では gear によって季節変化を描写した詩人の意図は季節の描写自体ではなく、Hengest の心情の変化を表すことにあったのだといえる。

## 注

- 1) 古英詩からの引用はすべて George Phillip Krapp and Elliott van Kirk Dobbie, ed., *Anglo-Saxon Poetic Records*, 6 vols. (New York: Columbia University Press, 1931-53) に拠った。
- 2) S. A. J. Bradley, *Anglo-Saxon Poetry: an Anthology of Old English Poems* (London: Dent, 1995), p. 441.
- 3) FR. Klaeber, ed., *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, 3rd. ed. (Lexington: D. H. Heath and Company, 1950), C. L. Wrenn ed., *Beowulf* (Exeter: University of Exeter, 1988), Johannes Hoops, *Kommentar zum Beowulf* (Heidelberg: Carl Winter, 1965), Bruce Mitchell and Fred C. Robinson, *Beowulf: an Edition* (Oxford: Blackwell, 1998) 参照。
- 4) Wrenn, p. 143.
- 5) 伝統的な季節の分け方に関しては Nils E. Enkvist, *The Seasons of the Year: Chapters on a Motif from*

- Beowulf* to the Shepherd's Calendar (Helsingfors, 1957), 伊藤忠夫『英語の社会文化史—季節名から文化の深層へ』京都, 世界思想社, 1988年を参照。
- 6) Carl Darling Buck, *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Language: a Contribution to the History of Ideas* (Chicago: University of Chicago Press, 1988), p. 1013.
- 7) Tacitus, *Agricola, Germania, and Dialogus*, trans. M. Hutton and W. Peterson, rev. by R. M. Ogilvie, E. H. Warmington and M. Winterbottom, Loeb Classical Library (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1970).
- 8) *Tacitus Germania*, trans. J. B. Rives (Oxford: Clarendon press, 1999), p. 224.
- 9) 風間喜代三『ことばの生活誌—インド・ヨーロッパ文化の原像へ』東京, 平凡社, 1987年, 285頁。
- 10) Buck, p. 1013.
- 11) 四季名の用例数は John F. Madden and Francis P. Magoun, Jr., *A Grouped Frequency Word-list of Anglo-Saxon Poetry* (Cambridge: Harvard University Press, 1969) を参照。
- 12) 大沢一雄『アングロ・サクソン法典』東京, 朝日出版, 2010年, 184頁。
- 13) ゲルマン圏内の祭りや習俗に関しては, 芳賀日出男『ヨーロッパ古層の異人たち』東京, 東京書籍, 2003年を参照。
- 14) *A Literary History of England* edited by Albert C. Baugh, 2nd ed. (London: Routledge & K. Paul, 1967), p. 35.
- 15) Bradley, p. 513.
- 16) 佐々部英男『中世の英語一覚え書』京都, あぼろん社, 1994年, 46頁, 伊藤忠夫, 54-55頁。
- 17) *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (Oxford: Clarendon Press, 1989), p. 829.
- 18) Bradley, p. 291.
- 19) 本文および現代英語訳は Scott Gwara, *Anglo-Saxon Conversations: the Colloquies of Aelfric Bata*; translated with an introduction by David W. Porter (Suffolk: Boydell Press, 1997) による。
- 20) Gwara, pp. 37-38.
- 21) Gwara, p. 125.
- 22) Bradley, p. 267.
- 23) Ida Gordon, *The Seafarer* (Exeter: University of Exeter Press, 1996), p. 17.
- 24) Bradley, p. 333.
- 25) Maureen Halsall, *The Old English Rune Poem: a Critical Edition* (Toronto: University of Toronto, 1981), p. 89.
- 26) Halsall, p. 125.
- 27) Halsall, p. 185.
- 28) Halsall, p. 125.
- 29) Klaeber, p. lx.
- 30) 谷口幸男『ゲルマンの民族』広島, 溪水社, 1987年, 36頁。
- 31) Walter J. Ong, *Orality and Literacy: the Technologizing of the Word* (London: Routledge, 2002), pp. 42-43.
- 32) 忍足欣四朗『中世イギリス英雄叙事詩 ベーオウルフ』東京, 岩波書店, 1990年, 108頁, 115頁。Finn Episode と *Fight at Finnsburg* の関係については、Klaeber, pp. 236-237 を参照。